

青木文教師とそのチベット将来資料

著者	佐々木 高明
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	001
ページ	173-183
発行年	1983-03-01
URL	http://doi.org/10.15021/00003787

解 說

青木文教師とそのチベット将来資料

佐々木 高明*

1. 遙かなる道——青木文教師の入蔵に至る経緯——

ダージリンからカリンボンへ行く道は、照葉樹林におおわれた斜面を屈曲しながら行く。それはいったんテスト川の河谷まで降り、再び山腹を登ってカリンボンの町にまで達するのである。1912年の3月初、この道をカリンボンへ向って急ぐ3人の青年があった。青木文教と友人のチベット学者多田等観、それにチベット人の留学生で、日本で勉学中を急遽本国に呼び戻されたツェワ・チトゥル僧正であった。3人の目的は、当時カリンボンに駐輿していたダライラマ第13世のもとへ僧正を送り届け、あわせて2人の日本人の入蔵（チベットへの入域）の許可を手にするのであった。

その頃のチベットをとりまく国際情勢は風雲急を告げていた。1893年イギリスはシッキムを保護領にし、チベットへの進出をはかっていたし、ロシアもブリアート出身のラマ僧をラサに派遣して、チベットに影響力を及ぼしていた。そうした中でチベットはかたくなに国を鎖ざし、外国人の入域を拒みつづけていた。だが、1904年、イギリスは武力を行使して、ヤングハズバンドに率られる英印軍がチベットへ侵入、8月に首都ラサを占領するに至った。ダライラマは難を避け、モンゴルのウルガに行き、ついで中国（清朝）に身をよせることになった。この間、本願寺法主の大谷光瑞は亡命中のダライラマに働きかけ、連枝の大谷尊由を中国に急派して、1908年6月、山西省の五台山でダライラマと会いさせ、日本とチベットとの仏教の交流を申し入れた。これが後に青木文教師らが入蔵する契機となったものであった。

その後、ダライラマは再びチベットに戻ったが、清はイギリスによって失われた地位を再び回復しようとして、軍事行動に出た。1910年春、清軍がラサに迫ったため、ダライラマは今度はインドに向け脱出し、しばらくダージリンに留った。ところが、この間に辛亥革命が勃発し、それによって戦況が一変した。このため、1911年春、ダライラマはダージリンを発ち、カリンボンへてチベットへ帰国することになった。青木文教らがカリンボンへ急いだのは、ちょうどこのときに当たっていたのである。

* 国立民族学博物館第2研究部

青木文教は明治19年9月28日、滋賀県高島郡安曇川町常盤木にある正福寺で、父覚生、母きくの長男として生れた。京都府立第二中学校から仏教大学（現在の竜谷大学の前身）に学んだ。ちょうどその修学の途中、明治41年（1908）には、先述のように大谷光瑞法主の使節とダライラマが五台山で会見し、両国仏教徒の修好の約束が結ばれた。これに伴い、大谷光瑞はチベットへの留学生の候補を選ぶことになったが、その1人として青木文教が抜擢されたのである。

明治42年（1909）9月仏教大学を中退した青木は直ちにインドに派遣され、仏蹟調査に従事した。ところが、その翌年の春、既述のように、ダライラマ13世はラサを脱出してインドに出たわけである。これを知った光瑞は、当時カルカッタに滞在していた青木に打電してダライラマに面接することを命じた。青木はすぐにダーズリンへ向い、英印当局の許可を得て、ダライラマの謁見をうけた。そこで彼は、大谷光瑞の意をダライラマに伝えるとともに、留学生の交換が実現しうることを確認した。使命を果たしたのち、しばらく青木はロンドンに遊んだが、渡英後約1年に及んだある日、突然、青木はダライラマからの書信をうけとった。それには「日本へ留学生を派遣するから帰朝の途次ダーズリンに立寄れ」とあった。青木は直ちに大谷光瑞に連絡をとってロンドンを発ち、マルセイユからボンベイへ、ボンベイからダーズリンへ急ぎ、ダライラマに謁見した。そのときにはまだ日本への留学僧の候補が決っていなかったが、2カ月後には、ツェワ・チトゥルとよばれる青年僧正が日本へ派遣される留学生として決ったのである。

ツェワ・チトゥル僧正は、日本では京都と神戸の六甲山に住み、勉学に励んでいたが、突然インドに滞在中のダライラマからの召喚の電報をうけ、急遽帰国することになった。これには青木のほかに多田等観らが同行し、彼らは、さきにも書いたように1912年の早春の頃カルカッタからダーズリンをへてカリンボンへ急ぐことになったわけである。

このときのダライラマとの会見の様相とその後の入蔵の事情などについては、多田等観は後に回想して、次のように述べている。

「1912年3月初、ヒマラヤのカリンボンで青木さんとともに、ダライラマ第13世に初めてお会いをした。ブータンのカゼウゲンという豪族の姉君が献上したという行宮の正殿で、私ども同列で会見賜った。……そのとき青木さんはトゥブテン・ダシィ **Thub-bstan bkra-sis**、私はトゥブテン・ゲルツェン **Thub-bstan rgyal-mtshan** というチベット語の法名をいただいた。また、それと同時にめいめいにラマ教のケンブ（僧正）の法服を1組ずつ賜った。七條衣・セン衣・センタブ衣・ドンカ・チャプル・僧帽・

僧靴などである。これが奇縁になって、2人が相前後してチベットに入ることになったのである。それから間もなく、ダライラマ一行はカリンポンを去りチベット本国に帰り、われわれはチャールス・ベル氏の紹介でダージリンの附近のグムバリという小駅にある民家を借りてそこに移り住むこととなった。丁度われわれの住居はラマ寺の門前にあったので、たびたびその住持の老ラマに会い、ラマ教の経典の話や、チベット語の疑問などを聞く便宜があった。青木さんはそこを根拠にしてチベット入りの準備をした。青木さんは先ずチベット語会話を勉強し、また入国についての調査をした。いよいよ機が熟し、9月初、ネパール山中に潜入し、遂にチベット入りに成功した。』
[多田 1957: 1]

ダライラマとの謁見のあと、6月24日にその一行がチベットへ向けて出発するまで、青木・多田の2人はカリンボンに留ったが、その間に日本から帰国したツェワ・チトゥル僧正はダライラマの侍従となって帰国することに決った。さらに青木・多田の2人もダライラマとともに入蔵することを強くすすめられ、入蔵認定証と旅券が下付された。しかし、2人の入蔵は英印政府当局の同意するところとならなかった。そのため、後日、時機をみて秘密に入蔵する計画を立て、青木らはダージリン郊外の民家でその機会を待つことにしたのである。

2人のうちまずチベットに向け出発したのは青木文教であった。大正元年(1912)9月9日の午前2時、降りしきる雨と濃霧、その暗闇の中で笈を負い、チベットの巡礼僧の姿に身をやつして、彼はまずネパールの国境へ向ったのであった。

2. チベットでの生活——入蔵から出蔵まで——

青木が入蔵路として選んだ道は、カリンボン・ガントクを經由する表街道ではなく、ダージリンからいったんネパール領へ入り、東部ネパールのイーラムから北上し、カンチェンジュンガ山群の西麓を通り、ウルンゾンを経てチベットに入るいわば間道に当るルートである。青木がこのような間道を選んだのは、インド領内を通る区間が短く、嫌疑のかかるおそれが少ないからだと述べている。その代わりこのルートはかなりの悪路で、その旅は大へん苦しいものであった。しかし、9月22日には強度の高山病に悩まされながらも、ティプラ(高度約5,700 m)峠を越えて、青木は無事にチベット領に入ることができた。それ以後は、ダライラマ発行の入蔵許可証と旅券によって、きわめてめぐまれた旅をつづけ、シガツェをへて10月15日にはツェンポ河畔のダライラマの行在所にまで達している。

ところが、青木文教に先立つこと13年、1899年（明治32年）から翌年にかけて、当時、まだ完全に鎖国の体制をとっていたチベットに入域を試みた河口慧海は、ネパールの国内を西北に大きく迂回し、中部ネパールのカリガンダキの上流からトルボ地方に入り、無人の荒野を単身で踏破してチベットに入っている。しかも、チベット滞在3年の間、彼は日本人であることを隠しつつ、その身分が露顕する寸前に脱出したことはよく知られる通りである。このきわめて劇的な河口の入蔵から出蔵までの経過に較べれば、青木や多田の入蔵はダライラマの許可証を持って入域しているだけに、よほど事情は好転し、安定していたということが出来る。しかし、それにしても英印政府当局の目をかすめ、巡礼僧の姿でチベット国境を越える努力は大へんなものであった。

それではこれらの学僧たちが、非常な困難と闘いながらチベットへ入域しようと努力した動機はいったい何だったのだろうか。一口にいえば、それはチベットの仏典を求めるためであった。それではチベットの仏典が何故それほど貴重なものと考えられたのだろうか。

チベットでは8世紀後半に仏教が国教となった。それに伴い梵語の仏教典籍の翻訳がきわめて組織的に行われたが、この訳経は14世紀前半ごろまでに、現在われわれがみるような形にでき上がったとされている。一般にこれらの翻訳された典籍は「チベット大蔵経」と総称されているが、このチベット大蔵経は、翻訳の仕方が逐語訳といつてよく、しばしばもとの梵語原典を容易に復元できるほどである。このため意識を旨とした漢訳仏典とは仏典研究のうえで異った価値があり、とくに散佚した梵語原典を復元、補足するような場合には、大へん価値高いものとみられるようになった。特にそのことがハンガリー人のケーレシ・チョマによって1836年に指摘されて以後、世界の仏教学者の目がチベットに注がれるようになったといってもよい。

河口慧海（1900年）、寺本婉雅（1905年）につづく、青木文教、多田等観らの学僧たちの入蔵は、いずれもチベット仏教の研究とチベット仏典の将来が、そのもっとも大きな目的であったことに間違いない。しかし、青木文教の場合には、後にふれるように、仏教や仏典の研究以外に社会や風俗・習慣といった世俗の研究をかなり行っている。それが大谷光瑞法主の指令であったかどうかは、いまになっては知るよしもないが、とにかく、この点が青木のチベット滞在の成果の大きな特色となっていることを注目しておきたい。

ここで話をもう一度、青木文教の旅に戻すことにしよう。ダライラマの行在所にまで辿りついた青木は、大正2年（1913）1月22日に、あこがれの都ラサヘダライラマ

の一行とともに到着した。ラサでの宿舎はヤプシプンカン家と定められた。山口瑞鳳の解説によると「ヤプシというのは“父君のお邸”の意で、ダライ・ラマの生家を言う。プンカン家は第11世ダライ・ラマの生家であった。勿論、これは13世ダライ・ラマの指図によるものであった。後に入蔵する多田等観が僧院（セラ寺）に入れられたのと対照である」[山口 1969: 429] という。このように青木が俗界の貴族の家に、多田が僧院にその居を定められたことは、兩人を知るものにとって全く適材適所の配置であったともいわれている。

さて、ラサにおける青木の勉学は、まずラサ語の修得とついで修辞学・文法学さらに歴史学の研究に向けられ、それぞれすぐれた師について学んだため、成果が非常にあがったようである。

前にも引用した「ラッサ時代の青木文教さん」というエッセーのなかで多田等観は次のように述べている [多田 1957: 1]。

「青木さんはラッサでもチベット語をつづけて勉強し、多くの貴族等と交際し、ラッサ語の修得に努めた。……法王庁から家庭教師としてロサンツェリンという人が任命され、それに就いて勉強した。その教師はチベット文字を書くのが頗る巧みな人で……青木さんのチベット習字はみるみる上達し、むずかしいとされているチベット草書体をも自由自在に書けもし、読めるようになった。」また、「文典の研究についてはツァワデル（前出のツァワ・チトゥルのこと）僧正の手ほどきをうけた。僧正はダライラマ学問所の出仕をしておったので、その指導する時間が限られていた。ラッサでは文典に造詣ある学者は稀れで、緻密にものを考える青木さんはその良師を索めるためにかなり苦勞をされた。……後にはカム・デルゲからラッサに来ていた貴族出のラマに就いて学んだ。そのラマは文典の学に深い識見を持っていた。青木さんが文典研究を大成されたのは、彼に負うところが多かったように考えられる。」

さらに「青木さんは、学究の暇には世界ニュースを法王庁に呈供した。当時、第1次欧州大戦中であつたが、欧州の事情に闇いチベット政府要路者は青木さんの解説によりどれ程啓蒙されたか測り知れぬものがあつた。この機会を利用しチベットの作文の練習と美しい草書体の習字ができたともみられる。」また「青木さんはチベット歴史に書かれていることと実際の事実を、古老や学者にききだして照合される等、その方面の探究も忘れなかつた」ともいわれている。青木のチベットにおける研究がどのような方向を指向していたか。ここに引用した多田等観の回想は、それを的確に示しているように思うのである。

几帳面な性格をもつ青木はラサ滞在の3年間、日課をほぼ次のように定めていた。

午前7時起床，9時より12時まで勉強，午後1時頃茶菓を喫し，その余の多くを訪問に費し，6時夕食，所要の事務と補修を行い，11時就寝というスケジュールである。ところが青木のチベット滞在の記録である『西藏遊記』（復刻版）によると「頻々として起りくるラッサ社会の祭礼儀式は予をして局外におらしめなかった。公私共にその渦中にまき込まれて1年の約1/3は蔵人と一緒に呑気な怠惰な日を送らねばならなかった。この外毎月一兩回は宮殿，離宮を始め諸大臣，貴紳等を訪問する毎日数時間，半日，1日と費やした上に予がなまじ写真に興味をもっていたため，1人か2人の素人写真屋しかないところのラッサでは，予のカメラが驚くべき活動をなし，無料撮影の写真師として忙殺されたるもまた大なる支障であった」[青木 1969: 216]という。だが，「しかし」とすぐ言葉をついで，青木は「かように修学上に失った損害は活社会から得た知識経験で補われて余りあったと信ずる」と述べているのである。

ラサの市井に生活し，その生活文化の全般に亘ってひろい関心を有し，知識の獲得につとめた青木の面目躍如たる言葉である。

「僧院生活をしていたため，たまにしかラッサへ出る機会」がなかった多田とは異なり，俗人(貴族)の家に起臥した青木は毎日午後の「訪問」やその他折々の「交際」のなかで，社会的な見聞をひろめることができたわけである。青木はラサの町々やその近郊の名跡など各地を訪れたのをはじめ，ラサの貴族や市民とひろい接触をもち，チベット社会の制度や風俗・習慣など生活文化のさまざまな面について詳細な観察を行い，考察を加えた。それをきわめて正確に『西藏遊記』（第1編「入蔵記」第2編「チベット事情」第3編「出蔵記」から成る）のなかに書き留めているのである。

青木の『遊記』は河口の有名な『西藏旅行記』などに較べるとドラマティックな要素は大へん少ない。しかし，入蔵・出蔵の旅行記の部分の記述はきわめて正確な地誌といえるものであり，ラサの滞在中の情報を整理した「チベット事情」は当時のラサを中心とした地域の地誌的あるいは民族誌的な報告として，いまでも第一級の資料的価値を有しているとみて差支えない。このような青木の研究上の特色は，くり返し述べるが，彼が仏教学を専修するのではなく，市井の一学徒としてひろく情報の収集を行ったからにはかならない。さらに，こうした青木の研究態度は，後述するように，彼の将来資料の特色のなかにもよく反映していることを，あらかじめここで指摘しておくことにしよう。

このようにしてラサにおける研究生活の3年目を終えた大正4年(1915)末，青木は本国からの帰朝命令に接する。彼の指導者でもあり，庇護者でもあった大谷光瑞が，そのしばらく前に法主の地位を退いていたからである。青木は直ちに帰国の準備をな

し、翌大正5年(1916)1月26日にラサを出発した。往路と異り、ギャンツェをへていったんシガツェに立寄り、そこでタシラマ(パンチュンラマ)の謁見を許されたのち、再びギャンツェにもどり、そこから一路南下してチュンビの谷を通り、3月7日にカリンボンに帰着している。

ところが、青木文教とほぼ同時期にラサのセラ寺に滞在していた多田等観は、大谷光瑞法主の退位後、その援助が絶えたあとも、ラサに留って研究をつづけ、その後8年をへて帰国した。多田は帰国に際し、大量のチベット大蔵経と蔵外の仏典を80頭の馬に積んで運び出したのである。「これに較べると青木の方は空手還郷にも似ていた」[山口 1969: 432]とさえいわれるほどである。

このような状況のため帰国後の青木は、必ずしも恵まれた環境のなかには置かれなかったようである。

3. その後の青木文教と将来資料の意義

1917年4月、帰国した青木文教をまちうけていたのは手厳しい争い事であり、彼はそのことから手痛い打撃をうけたようである。その争い事の相手は青木より一足先に帰国していた河口慧海であった。山口瑞鳳はその間の事情を次のように記している。

「河口は第2回の入蔵の際に、ダライ・ラマからパンコル、チュテン¹⁾の写本カン・ジュル²⁾を受け取って、日本に将来していた。その一揃いの宛先をめぐって両者のいい分が一致しなかったのである。河口は証拠品を立ち合いで見ることを主張し、青木も自らの主張の根拠を示そうとした。しかし、青木のいう宛先人であった大谷光瑞は、青木をさとして争いの場から外し、外地に派遣した。この為、青木は弁明の機会を得なかった。しかし、後悔はしなかった。彼は大谷光瑞に心服し、その手足の一つとなっていたからである」[山口 1969: 432]と。

年譜をみると、チベットから帰国して1年も経っていない大正7年(1918)2月、青木は東南アジア諸国に派遣され、約5カ年の間、主としてジャバにおける熱帯農業の実践調査を行う。チベット留学の知識が生かしきれない新しい仕事に青木は、おそらく割り切れない何かを感じていたのではなかろうか。しかも『西藏遊記』の初版の刊行が大正9年であるから、そのとき青木は日本にいなかったことになる。こうした不遇の時代がなおしばらくつづくが、昭和10年には京都大学の羽田亨教授の委嘱によ

1) ギャンツェにある寺院の名。パンコル・チュデ dPal 'khor chos sde が正しい。

2) 大蔵経経部。WT. bKa' 'gyur。問題のカンギュルは現在東京の東洋文庫所蔵になっている。

って、約2年間、京都大学でチベット語を教えている。さらに昭和16年からは、外務省の嘱託となり、約6カ年間チベット関係の調査・工作に従事することになり、はじめて厚く遇されることになったようである。『西藏文化の新研究』（昭和15年）、『西藏の民族と文化』（昭和17年）などが相ついで上梓され、また外務省調査資料として「西藏全記」（昭和20年）、「西藏語学」（昭和22年）などがまとめられた。いずれも、この時期の仕事であった。

戦後は、昭和22年から4年間、連合軍総司令部の民間情報局（SCAP）に教育顧問として勤務していた。ところが、昭和26年3月、それまで講座担当していた多田等観が急に渡米したため、そのあとをうけて東京大学文学部のチベット語講師に就任することが決まった。多田が早くからチベット学者としての地位を得ていたのに対し、青木は出蔵後35年にしてはじめて学界で用いられることになったわけである。晩年の青木文教をよく知る山口瑞鳳は、東大への就任は「勿論充分に酬いられたわけではないが、（それでも）青木の傷ついた矜りを癒してくれるところがあったに違いない。このとき（青木は）『チベット文典』と“Study of Tibetan Chronicle”を書いた。殊に後者には青木の情熱がそそがれた」[山口 1969: 433]と述べている。

しかし、この書物 *Study on early Tibetan Chronicles regarding discrepancies of dates and their adjustment* が1955年に完成して間もなく、青木は不治の病についた。そして昭和31年11月7日、青木は報いられるところの薄かったその生涯を閉じたのである。享年70才。

青木文教の後半生をかえりみると、それは決してめぐまれたものではなかった。青木文教と多田等観はほぼ同時期に入蔵したものとして常に比較されるが、インドでドラマとコンタクトをもち、入蔵許可証を手にし、入蔵するところまでは、青木が一步先じていた。ところが、前にも記したように、青木はラサ市中に俗人として居住し、チベット滞在、3年余で出蔵してきたのに対し、多田は僧院に居住し、滞在も10年以上に及んだ。その上、何よりも違いは帰国に際して、多田は大量のすぐれた仏典類を将来したのである。このため、帰国後の青木に対する日本の学界の扱いと多田に対するそれとの間には大きな差が生じた。多田が学界に積極的にうけ容れられ、やがてチベット学者としての地歩を築き上げたのに対し、青木は学界にはほとんどうけいられなかった。

その大きな要因は、青木の側からすれば、河口に託して将来したつものの仏典類が、その通り認められなかった、というような事情もあるが、何よりも大正末期から昭和初期のわが国のチベット学界の動向と青木の研究の方向が一致しなかったということ

がいえるのではなからうか。

ラサ市中の貴族の家に滞在し、3年余にわたって青木が研究したものは、前にも記したようにチベット仏教学のみではなく、むしろ語学にはじまり、文献学、歴史学、それに社会・宗教・文化にかかわるひろい問題であった。帰国直後に刊行された『西藏遊記』の中心部分をなす「チベット事情」は、青木の調査報告の一部とみなしうるものだが、その内容はチベットの地理的概説、対外関係にはじまり、ラサとその周辺、政体と行政組織、宗教、教育、産業、交通から軍備、人情風俗、年中行事にまで及んでいる。当時のチベットについての丹念な調査とその記録である。このような研究・調査の方向は大谷光瑞の指示によるものではないかと私は想像しているが、確たる証拠はない。いずれにしても、その当時、青木がめざしていたものは、単なるチベット仏教学の研究ではなく、総合チベット学あるいはチベット文化学とでもいうべきものではなかったかと考えられるのである。しかし、当時の日本のチベット学界は、不幸にしてこのような傾向の研究をうけ容れる状況ではなかったようである。当時の学界の関心の中心は仏教学的な研究であり、仏教関係の典籍の将来とその研究がチベット学界の主要関心事であったといえる。このような趨勢のなかでは青木の研究は学界の関心と呼ばなかった。また、青木がチベットから持ち帰った資料類は、河口や多田のそれに較べれば分量も少なく、且つきわめて雑多で、仏教研究という点からみれば一級品に属するようなものは何もなかった。したがって、その当時から、学界において、それらはほとんど価値のないものとみられていたようである。

しかし、ひとたび仏教学的な関心からはなれ、チベットの生活文化の研究という視点に立てば、この青木のコレクションには、また別の評価を与えることができる。例えば、ラサの市井の宗教生活をそのまま写しとったかのような、その「雑多さ」は、当時のチベットの生活文化のありようをもっともよく示しているといえることができる。そこには河口や多田のコレクションには見られない民衆生活との接点を示すものも少なくないのである。したがって、このコレクションは最近では、チベットをチベットとして理解したいと考える人たちにとって、きわめて価値高いものと認識されるようになったのである。

青木の研究の方向とそのコレクションの意義が理解されるまでには、彼の出蔵の時点から数十年の時日の経過を必要としたわけである。この点に青木文教の不運があったといえるのではなからうか。

4. 民博所蔵「青木文教コレクション」について

国立民族学博物館において所蔵する青木文教将来チベット民族資料（「青木コレクション」と略称する）は、別添リスト(pp. 8-10)の通り、計142点から成る。もとは神戸市在住の小倉捨次郎氏が所蔵されていたものを、同氏の御希望により、昭和53年11月18日に本館に搬入、整理・評価などの作業を終えたうえ、翌54年8月17日に正式に受入れたものである。その間、資料の紹介、旧所蔵者の小倉氏との仲介、さらには資料の整理などに、お骨折り頂いたのは兵庫県立近代美術館副館長（当時）の増田洋氏である。同氏の労に厚く御礼を申し上げたい。

「青木コレクション」142点は、「はじめに」（長野泰彦）のなかでその概要が示されているが、これらは小倉捨次郎氏が所蔵しておられたコレクションの大部分を占めるものである。ただし、同コレクションのうち、小倉氏の御希望と博物館側の整理の都合により、若干のものが、その後も小倉氏の手許にとどめられることになった。そのおもなものを列記すると、次の如くである。

金色釈迦牟尼座像（高15.2センチ、巾9.7センチ）、ソントゥェン・ガンポ王像（青銅像、高18.8センチ、巾14.3センチ）、釈迦牟尼仏画像（一軸、66センチ×47センチ、絹地彩色）、チベット植物標本78点、岩石標本5点、化石6点、砂1点、貨幣22点、紙幣2枚、切手3点、封筒2点、宝石類17点、石製品類16点、その他『西藏遊記』（初版）1冊、『西藏写真帳』1冊、写真原版、インド地図6葉、辞書用メモ27点、手帳6冊、その他である。

かつて、小倉氏は「神戸市住吉町小倉捨次郎所蔵 チベット・コレクション目録（元チベット入国者青木文教氏の蒐集によるもの）」という表書きのある目録を作成、印刷しておられるが、その目録の内容は、国立民族学博物館に譲渡された資料と上記の小倉氏の手許に残されたものとにほぼ対応する。ただし、上記の目録に「七九、ラサの鳥瞰図一幅 1 m 34 cm × 1 m 68 cm」と記載されていた地図は、われわれが小倉氏と資料譲渡について話し合いをはじめた時点で、すでに同氏の手許にはなかった。したがって、今回のわれわれのリストの中には加えられていない。

ところで、上記の小倉氏の旧蔵コレクションが青木文教のチベットからの将来品のすべてであるかどうかは不明である。小倉氏によると、右のコレクションは戦前に大谷光瑞氏から託されたものだというのである。大谷光瑞氏に深く傾倒してこられた小倉氏は、これを保管するとともに、大谷氏や青木氏に財政的な支援も借しきれなかったようである。

いずれにしても、小倉氏の厚意により、この貴重なコレクションが散佚することなく、今日まで保持されてきた。そのことをわれわれは心から嬉しく思うとともに、永年に亘りこのコレクション維持につとめられた同氏の御努力に心から敬意を表したい。

文 献

青木文教

1969 『西藏——西藏遊記・西藏文化の新研究』（復刻）芙蓉書房。

多田等観

1957 「ラッサ時代の青木文教さん」『日本西藏学会々報』第4号。

山口瑞鳳

1969 「解説・青木文教師」〔青木 1969: 426-434〕。